
お姫様な俺様

時雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姫様な俺様

【Zコード】

N6703A

【作者名】

時雨月

【あらすじ】

朝起きたら何だこれ！？誰よりも目立ちたい、でも誰よりも地味、そんな中学生姫宮優。そんな現実に憂れう彼に起きた突然の変化…、金髪碧眼チビッ娘になつた彼の苦悩たっぷり（？）な生活の始まり

始まり

プロローグ 姫様御乱心（前書き）

この小説はフィクションです、作中の人物、地名、団体は実際のものと全く関係ありません、全部作者の妄想です。

男なら少なくとも一度は、大勢の好奇な注目を一身に浴びてみたいと思うだろう？

例えばサッカーをしているときなら、華麗なショートを決めて皆の視線を独り占めだ。野球なら、力強いホームランで見るものの全員を唚然とさせられる。何もスポーツだけじゃない、勉強も然りだ。テストで学年1位なら学校中に自分の存在を知らしめることが可能だ。何、平凡が一番じゃないかだつて？この臆病者が！

俺は特別になりたい、どつかの五人組が

「ナンバーワンにならなくても～」

なんて歌ってるが、そんなの凡人の言い訳だ。俺はカリスマ性が欲しかった、突飛な頭脳が欲しかった、誰もを超越する強靭かつしなやかな肉体が欲しかった。

しかし神は俺を凡人として生を下さりやがつた。中肉中背、学力は中の中、顔は…いつ見てもぱつとしないな。スポーツでは、どんなに練習しても体格の良い奴が得を見るものだ、大人になりかけの体に勝てるわけない。勉強も、こんな不純な動機じやあ長続きできるわけがなく、世に言うガリ勉君に遅れを取つてしまつ。顔は…放つておいてくれ！

しかし神は俺を見捨てはしなかつた、最大のチャンスを与えてくれたのだ。それは嬉しい。うん、物凄く嬉しい…、だけど！

「こんなの反則だあ――！…ケホケホ！？」

天の神に届き給えと、虚空に叫ぶ細い喉は、耐えられずにむせ返つてしまつた。

俺こと姫宮優の、あまりに唐突で、あまりに情けない第一の人生の幕開けだった。

プロローグ 姫様御乱心（後書き）

某漫画を読んでて思いつきました、やっぱ恥ずいなーーーまあお暇でしたら読みくださいーーー！

あなたの願いを叶えてあげましょ
うは？ いきなり何コイツ？ 願って、お前は7つの龍の宝石から
出たシエニンか？

もう一度言い

… もう一度言います あなたの願いは何ですか

「冗談の通しない奴だな。さでにこれは夢か。おお！夢を夢と自覚できたの久しぶりだな。そうか、どうせ夢なら夢の中だけでも注目されたいなあ……、例えば全くの別人になるとか。でもただハンサムになるんじゃ女の子にモテても、男にはひがまれるしなあ。皆に注目されたいな。

やはりそうですか、期待した通りです

シーリング

... 100% ...

無粋な目覚まし時計の音で目が覚めてしまった。ぐそく折角夢判断できたつていうのに…。悔しいからこの目覚ましには永久に音を鳴らし続けてもらおうか?

…ああひなれい、だめだ、この田舎ましに対するやせやかな復讐なんだ、ここで止めてしまっては元も子もない。

復讐だ。報復だ。

「何を馬鹿な！」とやつてゐるんだ俺。

結局田代ましの罵倒に耐えられず、起床を余儀なくされてしまった。
次はこうはならないからな、覚えてろ、自覚まし時計！

ベッドから抜け出して伸びをする。あれ？目覚めは最悪で頭は痛いのに、体はやけに軽いな。最近疲れてたから、昨日は早めに寝たおかげだろうか。うん、そうだろう、そうに違いない。そのまま俺は、寝惚け眼のまま制服に着替えていく。…あれ、何だか着ずらい、凄く着ずらい。しっかり袖を通して手に手が袖から出でこない。それにズボンも丈が長すぎるので、ベルトをぎゅうぎゅうにしても拳2個分くらい余る。学ランって伸びる材質だけ？んなアホな。仕方なく袖と裾を折り曲げ、去年使つてたベルトで一番キツク絞る。…こんな格好で学校に行くのか？

二階の自室から降り、朝食が用意されているテーブルの前に座る。朝はやっぱ和食だよな。白い飯、味噌汁、焼き魚、漬物、生卵、完璧なまでの献立だ。ありがとうございます太陽、ありがとうございます大地、ありがとうございます母さん。命と労力をありがとうございます。

「…ありがとうございます…」と、おはよう母さん。俺の制服新しくしたの？洗濯物を干しに出ていたのであろう、籠を持ってパタパタと現れた。ごく普通の当たり前な挨拶と素朴な質問に、ごく普通な返事を期待しながら卵を割る。

「…あなた、どこの子？」

ベチャッ。卵が目標地点、茶碗のご飯中心部から大きく外れてテーブルに落ちてしまった。…え、母さんってこんなに冗談がキツかつたっけ？

「おいおいおい、息子の顔を忘れてしまったのですか？朝のジョークにしては突飛すぎるって」

「…え、優？ホントにあなた優なの？」

何を言つてるんだろうか？俺の顔を本気で忘れてしまったのだろうか、まったく卵がもつたいたいなん？なんだこの卵白にうつすらと写る俺の顔は…？見覚えが無いぞ…？

「つちよ、ちょっと待つて！」

俺は椅子から飛び降りて、飛び降りて？そりいえば座るときもよじ登つてたような…。あのときは寝惚けてたからわからなかつたのか

「アホの子ですか俺、いや誰の子ですか俺!? わけがわからなくな
りながら洗面台の前に立ち、鏡を覗く。「うう」とするが、
「なんで届かないんだ!?」

無様にぴょんぴょんと飛び跳ねるが、洗面台は嘲笑うかのように高くそびえている。無駄だとわかりながら挑戦を続ければ、後ろから母さんが俺の脇あたりを手に乗せて、抱き上げてしまつた。

「これで見れる?」

そんなガキみたいなことを……ん、なんだこの娘？膝までゆつたりとウェーブしながら流れ落ちていく金髪に、小柄でスッと整った顔立ち、どこまでも透き通りそうな碧色の眼、触れればすぐ折れてしまいそうな腕、のちつさい女の子が、鏡の中で母さんに抱き上げられている。抱き上げられてる？まさか……

えぴやーじー1 姫様御生誕（後書き）

評価に値するかわかりませんが、お読み頂いて感激です。

ひとまず俺は、子供のときに着ていたティーシャツとハーフパンツを身につけていた。下着は…、戦隊ものの絵がプリントされているパンツだ…。何で残しているの母さん？今は母さんと向かい合ってペタンと女の子座りをしている。アグラをかこいとしたら、

「めつ！」

つて足を叩かれてしまった。：え、しつけられてる！？

「確かに、あなたは間違いなく優だわ…」そりやそうだ、まぎれもなくこの心は俺の心で、誰の物でもない。姫宮家の長男、姫宮優だ。ただ体がなぜか置いてきぼりだ。

こんなちでこくて幼稚な体でいなければならぬなんて

髪の毛は以前の短髪とは打って變つて、上品さを保つた、染めた跡のない綺麗なウェーブの金髪で、触れれば汚れてしまいそうな白くて弾力のある素肌、声変わりし始めて粗暴になりつつあつた声色は口調は別にして、あどけなさを残した少女のそれである。年齢的には、一〇歳程度だろうか。指摘される前に異変に気づけよ俺。

の
ね

「そうだと思つ、もしかしたらベッドの中で目覚ましと格闘しているときにはすでにチビッ娘体型だつたのか?それにしても母さんはよく正氣でいられる。普通、息子が変形したら取り乱すだらうに。だが母さんはそんなことには動転せずにこうして

}{ } } } } ! ! !

訂正・母さんは馬鹿親ナンバーワンに殿堂入りです。おめでとう母さん。ひーひーひーどんどんどんぱふぱふー…あーいやーうひょっと抱

きつくなつて、寄るな寄るな、

「頬をすりすりするなあ――――！」

必死の抵抗はなかなか通じず、2分間くらい玩具にされた。

「…さて、行きましょうか。」へ？行きましょうって、まさか…、
「学校に行くの！？いや不味いって！」

「あらどうして？一度、先生方に説明したほうがいいわ。」

そ、それもそうだ。このまま学校に行つても誰も俺だと気づかないし、「お嬢ちゃん勝手に入つてきちゃだめだよ～」って門前払いされかねない。それに今日は確か1時間目は担任のシマムー先生も空いてるはずだ。シマムー先生こと嶋村榮花先生は、親しみやすいお茶目な若い先生だ。きっと俺のことが誰だか、話せばわかつてくれるはず。

「それじゃあ学校に電話して、支度をするから優も準備してね。」
そう言つて母さんは部屋を出て行つた。…さて、準備つて言つてもなあ。一応制服をカバンに詰める。…トイレに行きたくなつちまた。…！？そうだ、これからは方法が違つ…。
「考えるな考えるな考えるな…。」

呪文のように頭で何度も詠唱し、目的の場所へと向かつた。

…ふう。

さて、行きますかつと。俺と母さんは車に乗り込み、出発した。俺の住むこの町、藤岩町は、大きく分けて3つに区分される。南は広域に渡つて住宅地で、隣県の会社に勤める人たちのベッドタウンだ。北西は駅があることもあって微妙に発達しており、この市の商店街になつてている。本屋に立ち寄つたり、スーパーに行くにもここへ来ることになる。また、学校帰りの生徒の寄りエリアになつていて、北東には手を付けられていない林が広がり、そこにボツンと市立藤岩中学校が建つていて、

なぜこの林だけ手を付けられていないのかといふと、これ以上木を伐採すると、雨が降つた際にそのまま雨水が川に流れ込んで、川が氾濫してしまつそうだ。だから学校以外は建築しないよう市から声がかかるつているらしい。住宅地と商店街、学校のある林は大きな川で隔たつており、北と東から流れる川が合流して、西へ流れしていく地形になつてゐる。

鉄橋で住宅地と商店街は繋がれており、学校へ行く人はそこから商店街と学校を結ぶ橋を渡つて登校する。住宅地から学校に直で行ける橋を作つてくれれば近いのに、市では全く考えてくれない。まあ都会でもなく田舎でもない平凡な町だ。今は登校時間には遅い時間だから、通りには道行くサラリーマンぐらにしか見えない…はずだった。

「あ…歩美だ。」

幼稚園のときから、どうこうわけかず一つと同じクラスで、今も2年で一緒にクラスの幼馴染だ。歩美は何をやるにしても、トロイつていうか天然つていうか…、あれでよくイジメられないものだと昔は思つたが、多分人柄のせいなんだろう、誰に対しても優しく接するから、友人も多い。そんな彼女は今、一生懸命に通学路を走っている。…寝坊だな、間違いない。母さんは車を歩美の近くに寄せてウインドウを開けた。

「ハーヴィ、おはよう歩美ちゃん！」

歩美とは親ぐるみの付き合いだから、母さんも歩美とは仲が良い。でもハーヴィつて…。

「あ…おはよっ、じゅっこ…ます…。優くんのお母さん…、はあ…、はあ…。」

「ちょっと、学校まで走つていつたら疲れちゃうつて。乗つてきなよー」多分そうなるだろつたと予測していた、歩美はありがとうござりますと言ひながら後部座席に乗り込んできた。…いやちょっと待て、車に乗られたら…。

「あれ？そちらの外国人の女の子はどうちら様ですか？」

歩美は不思議そうな顔をして質問してきた。当然だ、この町に外国人なんて滅多に来るわけないし、それが車に乗つてたらなおさら気になる。どうしよう…何とか誤魔化さないと。

「ああコイツ、優ちゃんよ。」

母様いきなりカミングアウトですかあ——！？

「ノーノーノー、アイアムノットコウチヤン。アイアム…」

「なに馬鹿言つてるのよ、学校行つたら皆に説明するんだからいいじゃない。」

ぐむ、ごもつとも。歩美にだつて、どうせ学校でバレるんだ、それがちょっと早まつただけに過ぎない。

「…ふう、そうだ。俺は優だ、多分いきなり言われたつて信じられないだろ？けど…。」

「えつ…、優君って、ホントは外国人の女の子だつたの？」
一つ飛び越えた。俺の真の姿がチビッ娘なんか聞いてるよ、俺が優なのかどうかという問題は関係無しかよ。

「なわけあるか、昨日までの俺が本当の俺だつての。今は…、何でこうなつたんだかわからない。」

本当になんでこんなことになつたんだ？宇宙人の仕業か？わけわからん。

「えつと…、お人形さんみたいですつゝく可愛いよ。」

それを言うな。

「でしょでしょ？私もこんな女の子が欲しかつたから嬉しくて嬉しい。ねえ優、ずっとこのままでいい？」
勘弁してよ…。

さすが車だと早い、いつもなら三十分くらい歩く道を、ほんの五分で走破してしまつた。

「またあとでね、優くん。待つてるよ。」

ああまたな、と返事をし、俺は母さんと職員室へと向かつた。今は朝のホームルームの時間だから、きっとシマムー先生もクラスにいるのだろう。

「先に校長先生と話をしてるから、あなたはここで待つて。」
そうつ言い、母さんは職員室へと入つていく。

「暇だ、校長に話はうまく伝わつてんだろうか？俺が入つたほうがいいんじやないか？百聞は一見にしかずとも言うし。でもいきなり入つたら混乱させちゃうかな？あれこれ決めかねて、いるうちに、見知つた奴が昇降口から入つてきた。珍しいな、アイツが遅刻するなんて。

「重役出勤だな、福島。」

福島慶太。この学校の生徒会長で吹奏楽部の部長、同じクラスで同じ部活だ。ちなみに歩美も同じ部活だ。表向き真面目を通して猫をかぶつっているから皆の人望は厚い。が、地が出ると色んな意味で豹変してしまう危険な奴だ。でも根はいい奴で、いつもは気さくだから話しやすい。だから今も何気なく挨拶してやつた。…しまつた。

「…え？な、なぜ俺の名を…いやそれより、外人のお子様が俺に声

を掛けている？これは夢か幻か！？」

自分の状況をすっかり忘れていた、見た目小学生のパツ金娘が、いきなりフランクリーに話しかけちゃ不審に思つだろ。しかもまずい事に、相手はあの危険極まりない福島だ。…身の危険を感じて、た、しううがない、信じてもらえるかどうかわからないが試してみるか。

「そりやわかるさ、クラスメートで同じ部活だもん。俺は姫宮だよ。

「え、姫宮！？だつてお前…？え？昨日部活で会つただろ！？…ええ！？」

良かつた、普通の反応だ。いきなりそれが貴様の真の姿か？なんて

聞かれたら堪つたものじゃない。

「こんな格好じゃあ信じろって言つても信じてもらえないだらうけど、でも本当なんだ。試しに何か質問してみろよ。」

「ん……じゃあ担任の先生は？」

「シマムー先生、嶋村榮花だろ。もつと難しいの聞いてみろよ。」

「今度の文化祭で姫宮が提案した曲は？」

「冷静大陸だ」

博士次郎がバイオリンをつとめる、かなり有名な曲だ。きっと文化祭で演奏すればウケがいいと思って推したのだ。

「この前俺が姫宮だけに言つた言葉は？」

「……」いつの信念であり、追い求める夢であり、存在理由だ。

「ロリッ娘にブルマ。ースク水、是究極にして至高の存在也」

これだけで福島のことは説明できるだろう、つまりはこういう奴だ。

「むむ、一句一言違えず述べるとは……貴様は正に姫宮優本人だな。まつたく……でもまあ危惧した状況が起きる前に理解してもらえてよか

「最高だ、これこそ究極！心は健康な男子、身体は金髪碧眼の幼女、まさに至^リにはああ！？」

予想以上のリアクションありがとう、この背丈から繰り出すパンチは、きっと君の大事な宝箱に直撃していくことだろう。さつと撞击沈してろ、どうせ元々遅刻してるんだし。

そういうしていのうちに、母さんからお呼びがかかった。じきにシマムー先生も来ることだろう。……やれやれ、今度は2人相手に自己紹介か、先は長いな。

えぴそーじゅ 姫様御紹介

「はーいみんな注目ー！」

言わなくたって、みんな俺に注目してるのはシマムー。

「今日はみんなにお知らせがあります。この度、姫宮優くんは『J覧の通り女の子になつてしましました。」

それは言われてもわかんないだろうよシマムー。

ほら、みんな怪訝な顔して何やらひそひそ話してるよ……。

ざわざわ。

「え……あの子ホントに姫宮くん？」

「嘘だあ、姫宮君の影も形もないじゃない。」

「あいつどこの国のお嬢様だ？」「身なりからして中学生じやねえよ。」「でも姫宮君は今日欠席だし。」「風邪か何かだろ？」「またシマムーがトチ狂つたんじゃないの？」……。

えつと、なんだか話を切り出しつくいだ……。

つてか仮にも先生を本人の前で狂人扱いするなよ。

ああ、切り出しにくらいな。

「みんな！！何を愚かなことを言ひている……そこには我等がクラスメイト、姫宮優本人だろ……。」

福島！お前にじうじうときたくに限つて頼りになるや

「何しろ彼、いや彼女は俺と等しき夢を語り合つた同士であり、そして俺のために自らその究極かつ至高の姿を体現した奇跡の口ふぐおああー？」

「誰がてめえのためにこんな格好になつてやるか！…」

我慢できなくて放ったチョークが見事に刺さった。

俺を勝手に同士にするな！

ざわざわ。

「口…？」

「たつ確かに姫宮ならあんな感じでツツ「ミミしかねーいな…。」「もしかしたらあの子、ホントに姫宮くん？」「それより福島大丈夫か…？」「……」

むむ、良くも悪くも俺のことわかつてくれたみたいだな。

福島、貴様の犠牲は無駄にしないぞ。

「えー、何だか知らないけど、気づいたりこんな格好になつてしましました。多分このまんまかもしれない、みんなには迷惑をかけることもあるかもしれないけど、そこはひとつよろしくです。えつとそれと…」

ここで不覚にも間をとつてしまつた、

うわあ、みんな俺に注目してシーンとしてるよ、何か言わなきゃ…。

「えつと…、かつ可愛いとか、あんまり言いつなよな…。」

馬鹿か俺！？

いくら思いつかなかつたからつてこんなこと言いつかー！？

すまん福島、お前の犠牲は無駄にな

「素晴らしい！…これぞまさに伝説上の生き物とされている天然ツンデレ少女ぐはあああ！…！」

我慢できなくて放った黒板消しが見事に脳天にクリーンヒットした。

お前は少しくたばつてろ福島！

……つは！？これではまた場の空気が……

「……姫宮君可愛い……」

は？今どこからか聞こえたような。

わいわいがやがやー！

「おひさまは、泡がせきせき……！」

「その金髪かわいすぎ～～！～」

「ツンデレ姫っ！！」

姫ちゃん!!

おーおー!!? みんな囁きの隠辯が感動して泣き出しか?

何だよシンテレ姫って!? 苗字でもじるなよ!

では着々と男としての尊厳を失つてしまつ！

に来ないで頬すりすりはもうやめて

中華書局影印
新編全蜀王集

「姫」

になつてしまつた。

えぴやーくみ 姫様御紹介（後書き）

評価コメントが、同じような感じになってしましました…。すみません…次から気をつけます…。

「大丈夫かな…、姫ちゃん。」

隣の席から歩美にひつそり話しかけられた、姫ちゃんって強調するなよ。

歩美の身長は他と比べて低いから最前列の席だ。

無論俺がダントツでチビだから、俺も最前列なわけだが。

「痛たたた…、みんなきなり玩具扱いしやがって…」

「あはは。でも今の優くんすっごく可愛いよ。後でその髪触らせてね。」

むう、だから可愛いとか言つなつて…。

あのあと数学の先生が廊下で待つていて、シマムーが気づいて、早々にみんなを席に戻してくれた。

今は数学の時間だ。

…眠いよう、数学に限らず授業中の先生の説明つて子守唄みたいだ。

「 $(\times)^n$ のように \times の一乗と \times 、定数に展開されている式を上手く変形することで因数分解に持つていけるんだ。さてこの教科書の練習問題13を「今日は五月一日だから…、姫宮…お前が前に出てこれを解け。」

ふざけんなおつさん。

姫宮ってどう考へても出席番号は中くらいか後半の数だろ！
実際俺の出席番号は25番だ。

いつたい五月一日と俺の出席番号に何の関係があるってんだ。

「5の一乗は25だ。」

そうですか。

…くそつ・めんどいなあ…。

「じめん話してて説明聞いてなかつたね。優くんわかるかな…？」
教科書の問題だろ？しかも練習問題だ。こんなのが説明聞いてなくつたつてフイーリングでスラッと解けるだ。

「まあ見てろつて。」

「わ…優くん格好良可愛い…。」

どんな形容だ。

「えつと、×の「乗に」×「プラス6か」、「2と3だな」。
方針を立ててこざ書き込んでいく…う。」

「…先生」

ぴょん。

「どうした？」んなのもわからないのか、見た田と同じの頭脳なのが君は？」

「いえセツヅヤなくつて…」

ぴょんぴょん。

「書いてある問題が高くて…」

ぴょんぴょんぴょん。

「届きません…。」

教室が爆笑で溢れた。薄情者どもめ、ばかやろ…。

…無様だ。

…

「やつぱり格好悪いかったね、優くん。」

お前は可愛い」という単語を付けたいだけだろ？

みんなと一緒に笑って笑いやがつてコンチキショウ。すつげー恥ずかしかつたぞ。

…やつぱり数学って眠りの呪文だよ、先生はラホー使いか？

… まだ耐えられん。

「歩美、俺は寝るぞ。非常時以外は起こさないでくれ。」

「わ… まだよ優くん。授業は真面目に聞かなきゃ…。」

歩美のそんな囁きを耳にしながら、俺は既に深いまどろみに身を任せていた。

そこは草原の波であった。

風は火照った俺の体をゆっくり撫で、時をゆっくり押し流す。目を上げれば、空は雲よりも何よりも高く、果てしなく澄んだ青。そこで俺は一人だった。

何だろう、この悲しい気持ち。
何だろう、この切ない感覚。

そこで俺は一人ではなくなつた。

誰かいの…？

人影が見える、声は幼くあどけない。

人影も声に遜色なく小さい。

膝から下が、草の丈のせいで見えないくらいだ。

お前、どうしてそんなボヤけて見えるんだ？

君は、ここに一人でいたの？

人影は俺に話しかけている。

わからない、いやわかってる。

頭の中で答えを既に知つてた気がする。

何だこの既視感、でも確かに初めてな光景。

知らない、いや知つている。

じゃあや、友達になら、君は何て呼ばへばいい？

くん、……くん。……くん。

ついでに、直覚まし時計め、ついに仲間を呼んで復讐に来やがつたな。

だが俺は負けないぞ、返り討ちだ。貴様らが数で攻めてこようど、俺は五分で片付けられるぜ。

いや無理か、ずっと鳴らしかねるんだし、でもそれぐらい楽勝なんだ。俺は負けない！

「起立！」あ、しつしまつた！俺は反射的に起き上がるが、周りを見ると……、クラス中のみんなが俺を見てクスクス笑ってる……。数学の教師は、いつの間にか国語の教師に変わっていて、やはり俺を見ている。

「礼！」

福島の号令で礼をし、がたがたと座る。つし、心臓がまだバクバク言つてるよ。

「緊急時だから起つとしたの！」

「何で数学の後の休み時間で起つてないんだよ……。」

俺はひそひそと歩美に不平を漏らす。

こんなギリギリで起つてやつとするから良い晒し者じゃないか。

「だつて、数学が終わつた後の号令で起つてやつとしたのに、優くんぜんぜん起きないんだもん……。休み時間だつて起つてやつとしたのに、ピクリともしなくて……。」

さいですか。

なるほど、俺は号令も、休み時間の喧騒も物ともせず畠々と眠り続

けていたのか…。

でもピクリとも動かないって…、無呼吸症候群！？

「おい姫宮、何だその髪は。」

ビックリして前を向くと、国語教師が俺の前に立ち止まり、ジロリと見下ろしていた。

あ…、そういうえばコイツ、生活指導だつたつ。

つてか先生にとつて俺に対する注目点は髪だけですか。
もつと別に聞きたいことあるんじゃないの？

…数学では何も聞かれなかつたな、男性教員は順応性があるのか？

「地毛ですよ、氣づいたらこんな髪で…」

「ふざけるな！…そうだとしても、校則では黒にしぼりと書いてあるんだぞ、何故黒く染めてこない！？それに制服はビツビツだ！？」

無茶言うなよおっさん。

この格好になつたのは今日なんだぞ、染めてる暇なんてあるか。
それに学ランだつてブカブカなんだ、そつすぐしに用意できるか。

「とにかくその髪をなんとかしなきやな！…来い、職員室で染めてやる…」

「いやちょっと待つて、聞いてくれって…、痛！？」

いつ痛たたたたた！？おっさん待てつて、髪引つ張んなよ…

「ちょっと待つたあ先生！…」

危うく教室のドアまで来たところで、福島の叫びが教室に響いた。

…「コイツで大丈夫かなあ？些か不安だぞ、前例が前例だけに。

「何だ福島？貴様、生徒会長のくせにこの違反者を庇つつもりか？」

「先生、それは誤解じやあありませんか？生徒手帳には服装・髪型

に関する規定で、『元の髪の色を変色させることを禁じる』と書かれていて、脱色も禁止されていますが、姫宮のその金髪は紛れもなく地毛です。先生、『やうだとしても』って前提を認めていますよねえ？』

そつそなのか福島？だとしたらこのおっさんの早トチリ…

「いや！こいつの金髪をこのままにしておけば、いずれ他の女子も真似をするに違いない。悪い芽は早目に摘まなきゃならん…」

何い！？つまり俺は皆に対する見せしめか！？

「なるほどなるほど、あっはっは。でも先生は偽者の毛を頭に乗せていますよねえ？」

場の空気が凍り付いた。

…は？偽者の髪…まさか！？

「つそ、それは関係なかろう！？…いや、元々私はヅラなんて」

「先生、ヅラなんて一言も言つていませんよ？あ、もしかして先生はカツラをお被りにならっているのでしょうか？あっはっは、いやこれは失敬！まさか皆の風紀を正す先生が、自分を偽つてカツラをお被りになつているとは思わなかつたのでねえ。」

「ちつ違う！私はヅラなど被つてなんか…」

「（イプシロン）！…（クサイ）！…」

何を言つてんだ福島？

福島は急に「コードネームのような物を叫び出した。…うわ…？誰だこいつら！？顔を黒いマスクで隠した学ラン一人組みが降つてきた。

そいつらは先生に走つて近づくと、何かを奪つて教室から走り去つてしまつた。

…あ。

わいわいがやがや！「うわ！？マジで禿げてやがる！」「完全バーコードだ！読み取れるんじゃねえの！？」「ヤベー、超ウケル！」

教室内が「ハゲ」だの「カツラ」だのといった言葉で溢れていた。先生は正真正銘のバー「コードハゲ」であった。

いや待て待て、さつきのあの黒い一人組みは誰だよ、授業サボつて天井で何してんだ！？

…いけね、先生頭真っ赤にして怒つちまつたよ。

「福島あ！！貴様、先生に向かつて何ていうことを…」

「物騒なカラスですねえ先生、いきなり教室に入ってきて先生を襲うなんて、ねえみんな！」

わいわいがやがや！「そうだなあ！危ねえカラスだ！」「歩美ちゃん駄目じゃない、窓を空けてちゃ危ない鳥が入ってきてカツラを盗んじやうでしょ！」「あれ？カラスじゃなくて生徒…」「まったくねえイケ好かねえカラスだ！」

空気を読めていない一人を除いて、みんなはカラスだと連呼してゐる。みんな…、俺のためにこんな…。涙出てきそう。

…ひい！？先生、顔の色が赤を通り越して真っ青ですって！

「そんなわけあるか！貴様こんなことをしでかしてどうなるか…」

「先生。こんなところ、父兄に見られたらどうなっちゃいますかねえ…？（デルタ）…！」
パチンッ！
パチンッ！

今度は福島が指をキザつぽく鳴らすと、部屋が真っ暗になり…、出たカラス…！

カラスこと謎の学生は小型のプロジェクトのようなのを取り出

し、スクリーンに何かを映し出している。

…俺が先生に髪を引っ張られてるところだ。
「この場所は二二でない。」

……なんで小学校の正門の前なんだ？

「まッ待て待て！？こんな合成写真、信用されるわけな…」

でも先生、髪を引つ張つていたのは、ここにいる誰が証言してくれますか？ おわかりですかね先生？

「さよっ今日は由留だ、各自好きな科目の勉強をしていなさい！」ひ

そして先生は、悲鳴のよがりな声を残しながら頭を隠して逃げ去つて
いった。

た。……ここ4階だぞ？

とにかくすげえよ福島！何だかよくわからなかつたけど助かつたまには役に立つん

滅ぼしてでも君を救つぶべつ！？どうぐはああーー！」

「誰がテメエの姫だー!? ってかお前は姫つてよぶんじやねえ——!」

さつきまでの格好良さの欠片も残っていない、醜い姿となつて近づいてきた福島に、思わず口一キックで足元を崩して顔に怒りの鉄拳を食らわせていた。

あんた、さつままでの風姿が台無しだよ。

「や……やつたなあ」ここから……。俺は君のシンなり、甘えて受け入れるわ……。」「

おまえはマゾか、危険人物め。
しかも小学校で何してやがった。

その後三日間、先生は学校に来ることができず有給を使って引き籠もつてたという噂だ。

この事件は後に、

「カラスとカツラ事件」

として長く語り継がれたらしい。

福島にカラス部隊（先の出来事で命名されてしまった）のことを聞いてみたんだが、適当にはぐらかされてしまった。
まああいつが指揮官みたいなものなんだろうなってことはわかるが、
恐るべしカラス部隊の仕事の速さというべきか……ん?
カラスを使って小学校に忍び込ませたのでは……?
……考えないようにしよう。

えぴそーど4 姫様御授業（後書き）

大学のネットサーバが使えなくなつて、ずっと投稿できませんでした…。遅くなつて申し訳ない…初めての方は、読んで下さり感謝です

「助けてもらつたのに、貴様に対して感謝の気持ちが微塵も起きないぞ。」

「ふははは、姫のそのシンシンな台詞」こそが、俺の糧になるのだ！」

馬鹿は懲りずにまだこんなこと言つてる。

「あははは、わ、殴つちやだめだよ優くん。」

俺と福島と歩美は、いつものように放課後の帰宅路を歩いていた。訂正、あの馬鹿を追いかけて走つっていた。

「はあ……はあ……。ところで姫宮、昨日ついに発売したアレ、買つたぞ。」また何か、俺を嵌めるようと陽動に出やがった。

「ん？ 昨日が発売日のアレ……あ。
まさか！？」

「『溶けた血』のP 2版か！？」

「ふ……さすが我が同士。話がわかるではないか。」
だから同士つて呼ぶんじゃねえ、この犯罪者予備軍。
だが、『溶けた血』なら話は別。

「何……その、『溶けた血』って……」

ん、そうか。一般人の歩美にはこれがどれだけ素晴らしい作品かわからぬだらうなあ……よし。
説明しよう……！

……やつぱやめた、面倒臭い。

「要するに格闘ゲームだよ、すごく有名なゲームを題材にした。パソコン版のが最初なんだが、これやってると時間を忘れるほど楽し

いんだよ。」

気づいたら朝日が昇るのを見ていたことが何度あつたことやひ…。
「でも、パソコン版があるなら、また新しく買わなくともいいんじゃないの？」

「それがぜーんぜんよくないのだよ歩美ーーん！！」うわ、いきなり大声で割り込んでやがって…。

「このゲームはだな、元の『溶けた血』のゲームクオリティはそのままにし、キャラの強さのバランスを再調整、さらに新キャラ、新技、新要素を加えた、進化した超ハイクオリティかつ燃えぐな格ゲーなのだよ！しかも初回限定版には猫アルぶげあああ！！？」

「それ以上はテメエが嬉しいことだろーーー！」

あと、一秒、殴るのが遅かつたら大変だつたじやねえか犯罪者め。

「う…、つ…。カバンで顔を殴るのは反則で！」さこますぞ姫様。テメエ相手にルールなんて適用されると思つたか、つてか姫『様』はやめれ。

「でだ、今日は金曜であるからな、明日も明後日も休みだ、いくらでも遊べるぞ。今日はとことんいつてみようではないか！」
「むう、これはとても魅力的な誘いだ。だが…、

「お前のその話振りからすると、今日は俺の家に泊まる気か？」
「その通りです姫！何しろ数学の時間の寝顔は最高だつたしなあ、明日の朝、無防備に寝ている姫のホッペにシンシンぶるげはあああ！！？舌が、舌がーーーーーーーー！」
「マジで氣色悪いんだよお前はーーーーーーーー！」
ジャンプを利用したアッパーが見事に顎に刺さつた、ザマミロ。今日でコイツを家に泊めるのは終わりだ、何されるかわかつたもんじやない。

「福島君可愛しそうだよ優くん…。でも、今日は優くんのお家で遊ぶ

んでしょう？私も行つていいくかな？

「おー、来い来い。一人きりはシャレにならない。」

「ゲーム持つてきて姫様のお宅に参りますぞーーーーーーーーでは後程、

サラバ！！」

福島はやかましく叫ぶといつもの別れ道で猛烈ダッシュを始めて突つ走つていた。

：不死身か、アイツは。

さて、二つの橋も渡り終え、住宅街に入り、我が家ももうすぐだ。
歩美は、

「家戻るの面倒だからそのまま優くん家に行くよ」

とのことで、いつもの別れる曲がり角を一人同じ方向に曲がった。

……着いた。あれ、車がある。

母さん家にいるのかな？

……！？

「歩美……」

「ん、どうしたの優くん。お家に入らないの？」

「いや……、何か物凄く嫌な予感がするんだ。」

そう、この玄関のドアを開けた瞬間、底知れぬ不気味な何かが、俺の身を危険に晒す。

俺の脳がそのよつて俺に警鐘を鳴らしているんだ。

「気にしすぎだよ、早くい。」

歩美は俺の気も知れず、家に入ることを促す。
ホントに気のせいか？杞憂ならいいが。

俺はドアノブに手を伸ばし、扉を開けた。

「ただい」

「おかげり、優！ 今日は早いわねー、あら、歩美ちゃんもいらっしゃい！」

なんで速攻で出でてくるんだ母よ、張つてたのか？

「まあ優、新しい服を色々買つたから全部腕を通してみなさい！ あー、今から楽しみねー！」

予感大的中。

おい歩美、にやにや笑つてゐんじやない、薄情者。

「な…、勝手にそんなこと…、てか服なんて小ちこときのを着れば
「あんなガサツなもの今の優には着せられないわよー、ほら早く！
あ、下着も買つたからね。」

最悪だ。

そして俺の部屋には大量の『女の子用』の服が置かれていた。
息子の不幸に上じて何やつてんだ馬鹿親め。

…あれ？

「制服まで女用なの！？」

そう、服の山の一部に、わが中学の女生徒用制服、つまりセーラー服とスカートが置いてあるのだった。

「一応は聞いてみたんだけど、あなたの身長に合っていない学ランは無いんだって。あつても買わなかつたけど。」

おう、待て。

仕方ない、来週もTシャツハーフパンツで登校するわけにもいかないし、着てみるか。

「着方わからなかつたら着せよつかあ？」

「あ、私も優ちゃんに着せたいなあ。」

わなわな。

二人の手が不気味な動きをしていく。

部屋から出てつくれ。

下着も換えるだと、何だこのふわふわした布切れは…？…う、肌に密着してるので気味が悪い…。

スカートか…、男がこんなの着るなんてみつともねえなあ。…股がスースーして頼りない感じだな。

そこでセーラーを着てスカーフをする…と。あれ？スカーフなんてどうやつてつけるんだろう？

「困つているようだな、俺がお手伝ぎに、やーーー！？」

「なんでおまえがいるんだよー、つてか入ってくるんじゃねー、福島ー！」

突然ドアから現われた変態に、俺の戦友目覚まし時計を投げ付けてやつた。

「ふ…、ふふ…、偶然ドアを開けてみたらヒロインがお着替え中。お決まりな状況だ！」

意図的にタイミング見計らつて入つておきながら何を言つ。どうやら俺が着替えてる間に来てたらしい。

「優くん、スカーフ巻いてあげるからはいっていいかな？」

歩美が控えめな声でドアの向こうから呼んでいる。まあ歩美ならいいかな。

「おう、頼むよ歩美。」

「じゃあ失礼しますつと。…優くん……、凄すぎ。」

何がだ。

「ほり、端を持つてこう折り曲げながら中に入れて…。」

「面倒だなあ、やっぱ学ランのほうがよかつたなあ。楽だし。」

「絶対ダメ、今の優くんすつごく可愛いんだから、学校のみんなも驚くよ。」

そうか、そうだった。これからしばらぐの間はこの醜態を晒さねば

ならないのだつた。

「着替えおわつたんで入つていいですよー。」

歩美のオーケイサインが出た瞬間、待つてましたと言わんばかりにドアがバンッと勢い良く開き、福島が侵入し、母さんも後ろから入つてきた。

「すげえ————！生の美少女学生だ！！カツカツマニア！」

「あらあら、予想を遙かに上回る可愛さね。あつ、あとで焼き増ししてね福島君。」

アンタもですか母さん。

「ほら優、鏡で見てみなさいよ。」

母さんから渡された鏡の中には、頬を微かに紅潮させて、青と白の卸したてのセーラーに身を包み、汚れ一つない白い足が長めのスカートから覗く、小柄な少女がいた。しかも金髪の色がセーラーと、日本人の黒よりずっと色合いが取れている。自分で自分に見とれてしまつた。

……はつ！？

「何考えてんだ俺————！」

母さん、俺はどん道を外れてる気がします。なのにどうして福島と一緒に興奮してるんですか？

「じゃ、次の服いくわよ。小さすぎる服は返さなきゃならなかつから。

どうやらこの服の山全部、着なきゃ解放されないらしい。

「

…………。

「優……くん……、それ……」

イウナ、イワナイデ歩美。

「冗談で買つてみたんだけど、ここまで似合つてゐなんてねえ。」

ナンテモノヲカツテキタ母サン。

「うお――――――生プリ ュアブラツグエあ――?」

テメエの反応が一番腹が立つ福島!-

俺は次の服だと騙されて、コスプレをさせられていた。それも、全国のおつきいお兄さん方の間で大人気の、あのアニメである。

「ほり、例のポーズをとつてくれ姫富!-」

ちょーありえない。

その後、やたらフリルのついた服や、うらピンク色のヒラヒラした服やら、やけに丈の長かつたり短かつたりするスカートやら、鬼角色々と着せられた。

中にはメイド服まであつたが、さすがにアレで警戒していたので、これを着ることは全力で抵抗した。母さんの見立てが良かつたのか、そのどれもが良好なサイズであった。三人は、俺の姿が変わるたびに感嘆の声を上げ、俺の仕草すべてに興奮していた。さながらファンションショーのモデルの気分であるが、嬉しくもなんともない。本当なんだからな。

「ふう……、姫のニコーコスチュームは全部見たし、もう夕飯の時間だから、俺は帰らせてもらつぞ。」

そういえばもう夕方であった。あれ？ 今日つてゲームするつもりで来たんじゃ？ いつの間にか趣面替えされてたようだ。

「じゃあ私も帰るね、バイバイ優くん。」

「さりばだ姫宮！」

俺がバイバイと返事すると二人は部屋から去つていった。母さんも夕飯の支度するからと、一階に下りていき。俺は一人部屋に残された。今はTシャツにスパツの格好である。

…少しだけ気に入つた服が、一つだけあつた。もう一度着てみよつかな、…着てみよう。

それは真っ白なワンピースであつた。首の辺りから、膝くらいのスカート部分の裾までボタンが十個付いていて、全く汚れの無い、綺麗な純白であつた。

鏡の中で、あどけない少女が天使の姿で、顕現していた。…こそばゆいな。でも…、何か…、懐かしいような

「悪い姫宮！『溶けた血』置き忘れちゃ……、た…？」

世界からこの部屋だけが取り残された気分だつた。いきなり現れた福島と俺は、石像のように固まつた。…と思ったのは俺だけだつた。福島はポケットからカメラを抜き出し、フィルムを巻き、シャツターリを切る。その動作を、ガンマンの抜き打ちのように一刹那でやつた。

「その調子だ。」

福島は満足したように、ゲームのパッケージを取つて部屋を出でいつた。爽やかな笑顔とともに。

鏡の中で顔を真っ赤にさせた少女を、俺は頭の片隅で可愛いなと思つていた…。

えひやーる5 姫様御披露目（後書き）

長い間更新が滞つて申し訳あつませんでした…。

「なぜ来なかつた、姫————！」

朝起きたら侵入者。

わからない、コイツが今俺の枕元で怒鳴り散らしている理由が。

：一日連続徹夜で『溶けた血』やつてたんだ、学校に行くまでまだ時間あるし、もう少し寝かせる。

「朝起こじこぐるのが、幼なじみのお約束だろ？がーーー！」

吐き気がする、そのシチュエーションは。それに、俺とお前とは中学からの付き合いだろ、勝手に関係を捻じ曲げるな。こいつはツツコむ気力もないんだよ。

「ちなみに今、朝の八時半だぞ」

助けてください。助けてくださいーーー！

「おはよう、優く…うわ、田の下すごこクマだよ

俺は不承不承、福島（ふりがなは『へんたい』）と並んで走り、朝のホームルームに滑り込んだ。休止モードの体を強制的に立ち上げたのだが、徹夜のダメージはやはり深刻であった。

「ゲームに熱中しそぎたらダメだよ、今日は部活もあるんだよ？」

「あー大丈夫、一時間田使って寝てればいいつあるわ」

「残念、一時間田は体育だよ」

神は我を見捨てた。

「そりそり、シマムーがね、姫宮君は今日から女子の授業に合流してね、着替えも女子と一緒にだよ、って言つてたよ」

一瞬幻聴が聞こえた。何て言ったこの人は？ 女子と一緒に？ ……
… ぐは！？

この学校の体育は男女別なねで、二組合同で行われる。そして奇数組で女子、偶数組で男子がそれぞれ着替えをすることになつている。

いいのかよシマムー？ 中身は健全な男の子なんだぜ俺。いやよくないに決まってる。だからおれは体操着を持つて教室を後にしようとした。しかしどアには女子が立ちはだかつていた。

「姫ちゃん行っちゃダメー！」

「あつちはケダモノの巣窟なのよ！？」

「私たち姫ちゃんになら、見られても平気だからー」「行つたらアイツラに輪姦されちやうー」

待て、最後のはヒドクナイカ？ でも確かに、男子の視線が煩そりだな…。でも女子と一緒に着替えだなんて…、イカンさすがにそれはでも男子にマフサレつわあああああ！

結局、俺は女子トイレの個室に入っていた。

さて、アレが現在の全国の学校から廃絶したのはいつごろからだろつか？ 小学校のときでさえ、俺の学校では既に消滅していたので、福島に教えてもらうまで知らなかつたくらいだ。もちろんその直後に殴つたが。中学でも当然アレは無く、ハーフパンツ着用が義務付けられていた。

しかし体操着袋の中には、ハーフパンツの代わりにブルマが入っていた。

俺は露呈される太ももをTシャツで隠そとしながらグラウンドに向かい、朝に母さんが言つてたことをぼんやり思い出していた。

「優に合つサイズのハーフパンツが無くて買えなかつたから、代わりにブ…」

確かこの辺りで玄関のドアを閉めた気がする。有得ねえ、なんでハーフパンツが無くて、ブルマがあるんだよ！ いや文句言つたつてどうにもなるまい。とか考へてる間に着いてしまつた。授業が始まるとまだ少し時間があり、みんなバラバラになつて話したりダベつてたりしていた。

…見つかった。誰かが俺を指差して誰かに話してるのが見える。あ、走つてこつちに来る。その数がだんだんと増えていき、二人…、五人…、十人…、これぐらい数えたあたりで、俺は逃げ出していた。

あつさり捕まつて玩具にされた。

「…といつ理由なんで、今日は」の格好で授業を受けます

俺は四十人近くの女子（プラス福島）に弄ばれるとこりを女子担当の女体育教師に剥がされ、難を逃れていた。今はその経緯を話したところだ。

「そう…、突然環境が変わったのだし、急に別の用意をしろと言わ
れても無理だもんね。今日はそれでも構わないわ。…これから大変
でしおうけど、頑張ってね」

初めて優しい言葉をかけられた気がする。

色々問題はあつたが、やつと体育の授業だ。…どうせグラウンド
を駆けずり回るだけだがな。夏のプールの授業に入るまでは、体育
なんて我慢の時間でしかないのだ。

「優くん、寝不足なんでしょう？ あんまり無理しちゃダメだよ」

隣に並んで走っていた歩美が話しかけていた。

「別に問題ないよ、むしろいつもより体が軽くて走りやすい気がす
るんだ。…て、実際そうか

「でも…」

「気にしそぎだって、ほら、先に行くぞ」

体が軽くなつたのは事実であり、男子の体育のランニングのとき

より楽に感じていたのも確かだつた。

「あ、あれ？」

だがその分、筋肉の量も肺活量も落ちていたのだろう。それなのに急に張り切つたせいだろうか。さらに寝不足も合わさつたためか。

急に体は砂袋を乗せられたように重くなり、視界がブラックアウトしながら傾くのを感じていた。大きな音と衝撃があつて、ぶつ倒れてる自分を発見していた。

「く！ だか 言 の ！ 先生、 富士 倒れ ！」

…情けない。手足はだらーんと弛緩し、視界は未だ薄暗く、混濁した意識は何も考えようとしてしない。

「 ら熱射 ょう 、保 員！ 手 て！ 姫
保 室に連 行き 」

何も聞こえない。
何も理解できない。
何も感じない……。

空はいつの間にか優しい夕日の色に包まれていた。目につく全てのモノ、永遠に続きそうな草原も、遠くに見える森も、高みに見えた雲も、あの人も 暖かく燃えていた。

もう、帰らなくちゃ

なんで、まだ大丈夫だろ、もつと遊ぼうぜ? …でも、『つん』とは言つてくれないんだよなあ。…また知つてゐよ俺。

早く帰らないと、お母さんこ怒られちゃう

また、淋しが込み上げるような気持ちだ。せつかく、やつと会えたのに…? …せつかく? やつと?

大丈夫、また明日遊びにくるから

その言葉で、俺の心もあつたかくなつた。

甘つたるい匂いがする…、それに体が動かない。重いとかそういう次元じゃなくて、本当に動かない。

「ん……、な!?

「あらやつとお皿覚め?」

あまりの現実感の無さに絶句した。つらすらと皿蓋を開けた目の前には保険室の女教師が、鼻がくつつきそうなほど近づいて、身じろぎじょりともがいた四肢はベッドにロープで縛られていた。

拉致られた!?

「あなたの体のことは、色々と聞かせてもらつたわ。面白い例だから、実際に調べさせてもらつわよ。『ふふ…』

ヤバい、ってか下唇を軽く噛むように発音してヤヴァーい。何がヤヴァいかって、手がワキワキ動いてるのも不気味だし、うふふふふ

ふ……なんて延々笑い続けるのもキショく悪いし、何より右手に異様な器具が！

……な、なんで注射器なんて！？

「はーい、ちょっとチクッとしますよ～」

本能という名の警鐘が頭の中でガンガン響いている。あれを刺されたら良くて昏倒、最悪

「ひぐ
し

みたいに首をガリガリ掻き篭つて死亡！？

やめてやめて！ そんな物騒なもの腕に近付けないで、これで色々楽しんじゃうわよじやねえよ年増！！ ひいつー？ 「めんなさい、めんなさい！ 刺さないで、た……

「助けてくださいーーーーー！」

「任せろ姫ーーーーー！」

神は半分投げ遣りに救ってくれるようだ。

ガシャーーンーーー！ というガラスが割れる効果音と供に現われたのは、もはや説明はいらないヤツだった。

学ランの代わりに特殊部隊チックな服装を身につけ、両手には黄色と黒が螺旋を巻くロープと、何やら注射器より物騒な得物を持っていた。なぜ日本の学生がM4なんて持つてる！？ってかここは一階なんだから屋上からロープアクションなんてしてないで普通に入れよ！

「ここは任せろ姫、あなたは早く逃げ」

「任せたぞー、つてか一人とも助からぬのがベスト!」

『われるまでもなく逃げていた。

「ふ…、『で、でも…』『いいから早く、俺も後すぐに行く!』『きつとだよ!』ぐらりのやり取りは定石だろう、不粋なものだ」

「あら、あなたも逃げていたほうが身のためではなくて? かなり機嫌が悪いわよ私」

「抜かせ、以前から信用できない輩だと思っていたが、蛇蝎魔蝎の類だつたとはな! 貴様は会長直々に手を下してやる。(シータ)と(ガンマ)は手を出すなよ、俺の獲物だ」

そして戦いの火蓋は切つて落とされた、らしい。

全く興味は無かつたし、本気で相討ちになつたほうが学校のためになると思つていたしな。

後々わかつたことだが、あの女教師は気に入つた女生徒をとつ捕まえては怪しげなことを続けていたらしい。

そのことに關しては一応福島に感謝だな…。

あ、それよりさつとこの服着替えないと、いつまでもこんな格好じゃあ、また誰かに取つて食われちまつ。

えぴやーる 6 姫様御運動（後書き）

パソコン使えないとか」「くせつづり……、思いついたことがぱつと書けないし、「サ行の文字」を書こうとして電源ボタン連打して全部消えちゃったり……。まあ言い訳はこのへんにしないと見苦しいので……、更新遅れてごめんなさい……！ m (—) m

えぴやーく 姫様御抜擢（前半）（前書き）

長期間放置していたことの理由を見付けようすれば、いくらでも見つかるのですが、言つた瞬間にそのどれもが言い訳になってしまふでしょ。125日間の間、何も反応を示さなかつたことを深くお詫び申し上げます。今回中途半端な分量での投稿となりますが、僕が生きてることを示す、生存確認つことだ…。

えぴそーじ7 姫様御抜擢（前半）

「昨日は大丈夫だった？ 体痛くない？ 優くん…」

俺が倒れた次の日の今日、朝教室に入ると真っ先に心配そうな顔をして近づいてきたのは歩美である。そういえば、あの変態保険医に襲われたときはもう下校時間過ぎてたんだよなあ…。おかげで部活をサボつてしまつたじやないか。…元を辿れば『溶けた血』にハマッて完徹してた俺も悪いけどや。

「大丈夫大丈夫！ 別にどこも痛くないし、反省して睡眠時間ちやんと戻したし」

「そう…、本当に良かつたあ。もし優くんが今日来なかつたらどうしようつて心配だつたんだよ？ 昨日の部活だつて休んでたから、もしかしたら倒れた拍子に大怪我しちやつたんじやないかつて…」

「言えない…、いつも運動部の擦り傷や風邪つぴきな生徒の手当でをしている保険医が、実は目ぼしい標的を見つけては『あんなこと』や『こんなこと』をしようとしてきたなんて…」

「ね…、念のために早退したんだよ。ほら、この体になつてまだそんなに経つてないし、また授業中に倒れたりしたら怖いからさ」

「そつだつたんだ…。もつ、あんまり無理しないでよね…」

呆れたような笑顔を浮かべた歩美は、そのまま自分の席に戻つていつた。…さてと。俺はアイツの席のほうを見た。表紙カバーの黒い、何やら怪しい手帳を片手にニヤニヤ笑いをしている。…気味悪

あざむ。

「朝つぱらから向企んでんだ、福島？」

聞かれた本人は何故かシャーペンを取り出しながら机に向いた。

「おはよう子猫ちゃん。今の世の中にいるアリ虫どもを排除して新世界を作りうと思つてね。まずはあの保険医から…」

お前には死神が憑いてるのか？

「冗談だよ子猫ちゃん。でもまあ、彼女は来ないはずだ、二日後には辞職するであら」

わつきから子猫ちゃんつてヤメ…え？

「彼女つて…あの保険医のことか！？お前あのあと何があつたんだよ？」

「なあに、最後に勝つのは、知力・体力・組織力に秀でた者だつてことだよ」

自分の髪を指すべつようだ、サラッと言つてのけていた。恐ろしそう…、この生徒会つて、先生一人を消すのも楽にできてしまうのか…。

「不可能じゃないが簡単じゃないぞ？でも、姫の身に害を成した女豹には、それ相応に罰を受けてもらわねば気が済まないからな！ああ～～～～！無事で良かった、ひめさ」

お・予鈴だ。

俺はわざわざ自分の席に着席した。

国語の授業。

「えっと・そ・・・それじゃあこのページの3行目から音読を・・・

姫宮さん如何でしょうか?」

腰低いな先生・そんなにあのカラス事件のことが頭から離れないのか? 髪の毛は有無を言わぬず離れたのに。

「どうやら姫はそのよつな気分では無いようだ・無礼だぞ・下がれ
!」

どの面下げて言つてやがる福島。

「わつわかりました…・失礼しました姫宮様…

プライドの欠片も無いな先生・南無。

「今日はまちさんと部活に出れるよね・優くん?」

放課後のホームルームが終わるとすぐに俺の席に歩美がやつてき

た。

「ああ、一ちゃんと行くよ。ちよつと待つて、すぐ支度するから」

「焦らなくても構わないぞ、姫」

大慌てで支度して帰ろうとしても捕まえてきそうな奴が、その隣に悠然と立っていた。

音楽室に向かう途中、ふと忘れていたことに気がついた。

「そういえばさ、文化祭の曲つていつになつたら全部決まるんだ？ もう時間も無くなつてきたし」

そう、昨今の『ゆとり教育』といつ馬鹿げた風潮にも負けず、この中学では毎年文化祭が開催される。俺たち吹奏楽部は日頃培った実力を發揮するのに最適なこの機会を逃すわけがないのだが、本番一ヵ月前に迫つた今でも、曲が一曲しか決まっていないのだ。

「優君……、今日がその会議の日だよ？」

はあと、ため息をつきながら呆れた表情で、歩美は返事をした。

「さつわと決めないと、おっしゃる通り時間が無いですからねえ、姫様？」

意地の悪い声と表情で、部長がのたまいやがつた。びつやけり俺だけ完全に会議のことが頭から抜けていたようだ……。

「いやあ、それにしても、昨日は、テツカイメス猫に襲われて大変だつたよ。まるで豹のようだつた」

…その豹を肉体的にも、社会的にも封殺おまえは、国家権力の大つてところか。

「ひつ…！ ひ、豹…？ やだ…、そんなのが学校の辺りをうるついてるの…？ 優君怖いよー…」

俺と福島と変態保険医の一件を知る由もない歩美は、何故か日本には有りもしないはずの名前に萎縮して、小柄な身体をふるふる震わせて腕にくつついてきた。…おい歩美、いつまで抱きついてるんだよ。もう音楽室見えてくるんだぞ、こんなところ誰かに見られたら…

「あー…！ アコミンズーるーいー…！ 私も姫ちゃん抱っこするー！」

「あ、私も私もー！ー！」

「なになにー？ 今日は姫つち奉仕デーー！？ 一いつや乗り遅れちゃいけないよーーー！」

いい加減あんたたち女子は俺をオモチャ扱いするのを止めることは出来ないのか！？ しかもスーパーの特売みたいな名称を付けるな！

「ふむ、僭越ながら不肖福島、姫さまの」好意に預かり『ほーし』されるといったしましょうー！」

女子にモミクチャにされる直前に、猫殺し福島の左頬にハイキックをくれてやつたが、何故か満面の笑みを浮かべながら倒れていく様が見られた気がした。まあ、その後はもはや慣れっこになってしまった全方位圧迫攻撃に為す術無しな状態にされたわけだが。ん、白？ 今福島の声が聞こえた…よう…な…。

えひやーく7 姫様御抜擢（後半）（前書き）

長くお待たせして、大変申し訳ありませんでした。

「第三回文化祭の曲がいつよつか会議をはじめます」

軽いな、福島。

隣りでガタガタ震えている歩美を尻目に、猫バスター福島の司会を耳にした。てか、いつまでくつづいているんだ。

一通りモミクチャにされたあと、満足気な顔をした福島が皆をなだめて、音楽室に集合させた。あれでも一応は吹奏楽部の部長なわけで、女子は渋々といった感じだったが、皆を集めるのにそう時間はかかるなかつた。そういう統率をとる力があるくせに、なぜ自分の煩惱に打ち勝てない、福島。

「一・二回田で既に決まっている曲は、流行の映画の曲を入れようつてことで、『パイレーツ・オブ・カルビ牛』、それにコンクール課題曲の『風邪の舞』が選ばれたわけだが……」

あー、あらすじだけ知ってる。確かに、牧場で働く若者がある田牛の呪いにかかりて、月の光に当たると牛乳を渴望するようになるつてことで、親父さんに追い出されて、全国400ヶ所の焼肉スポットを制覇して呪いを解くために、海に飛び出すんだよな……。今やつてるのはその続編だつて、今度は豚トロの呪いだか何だか。……いや、古いだろ。全然流行じやない、誰だこの曲を推薦した田舎者は、今流行の映画はなんてつたつてゲゲゲの……、それは誰だつて演奏したくないか。それに課題曲の『風邪の舞』は、いろんな学校で人気になつてる曲なんだよな、他に3曲も別の課題曲があるのに、なぜかこの曲がコンクールの課題曲部門で演奏されやすいようなんだ。

福島
吼える。

それを言うな・マジでへこむんだよ。ほら見ろ・歩美が下向いてショボーンとしてるじゃないか。去年の夏の失態を思い出しやつたんじゃないのか。確かに映画の評価についてはそれなりに賛同はするが、言ひ過ぎだつて。

「それじゃあ部長、『パイレーツ・オブ・カルビ牛』は無しつてことですか？」

「いや、時間が全くといっていいほど無いからな、演奏はする。ただしそれをメインに添えるような真似は断じて許せないということだ」

女子一年の質問に淀みなく受け答えする部長。メインには添えない・・・ねえ。

「おー福島、そういうからには何かとつておきの企画を考えているんだろ? うな?」

「ザッシリライイイトウ…… その通りだよ姫…… さすが慧眼の持ち主だ！」

意味が同じ言葉を繰り返すな。

「我々が思いがけず手に入れた素晴らしい資質の持ち主……そり……姫にこそその答えが隠されている……」

「はいはい姫様をプロデュースしたいのね……勝手にやつてくださいよ……誰だよその姫つてのは……あれ？」

「姫」と、姫宮優をソリストとして仕立てあげ、本当のステージの姫様として活躍してもらうのだ……！」

フルネームで指名が入りました。それも途方もない注文。

「ふ……ふざ……」

あまりの突飛さに声が上手く出ない。ソリストってことはあれだろ……？ 僕がメロディーを全部やるんだろう？ で、他の人たちは伴奏に徹してサポートに回るって……。そんな横暴な案件が通るわけないだろ。他の3年生が許すわけが……

「さんせーい……」

「たのしそー……」

「姫ちゃんのソロライブ……キヤー……カッコいい、可愛いい…… 略してカワツコイイ……」

ほぼ満場一致でした。

「みんなの誰も反対意見は無こよひだな？」

いやだから本人がイヤだつて、

「それじゃあ姫のソロライブにふさわしい、ひとつお前のナンバーを選曲してあげようじゃないか皆のものたち……。」

「才才才才才才才才才才！」

反対意見は棄却されました　・民主主義の化身　・多数決の原理はここまで残酷なのか。

ペピヤー&姫様御出掛け（前編）（記書き）

最初にこの言葉を書つたのがトノハレになつてゐるなあ・・・、遅れて
「メンナサイ。

私の一日は窓を開ける」とから始まる。

夜更かしをしてしまい、腕を動かすのでさえ億劫であつても、カーテンを開いて朝の陽を一身に受け、窓を開けて部屋の空気を入れ替えれば、たちまち眠気なんて吹っ飛んでしまう。・・・たまに一過性な場合もあるけど。

単純な一日の始まりの儀式。その中にもし、君がいてくれるなら、それは始めから素晴らしいことが起きるとわかる吉兆になる。今までいつもそう、だから今日君が私の見える場所にいるのも・・・あれ？

「いやああああああ！…… 優ちゃん起きてええええ！…」

幸せのシンボルは、その艶やかなブロンドの髪を道路上にぶちまけながら、見事にぶつ倒れていた。

「8対2の割合で歩美が悪い」

「もう・・・、だから謝るから許してよー・・・」

金髪碧眼のわがままお姫さまは、上に羽織つたパーカーをピューピュさせながら私の隣を歩いていた。

「約束の時間に間に合わないから朝ご飯抜いてまでたつてのこ、一時間経つても出てこないなんて考えられないぞ普通！」

「だったら・・・・・チャイムを鳴らせばいいじゃない?」

「それで二三七拍子をせつてみた

・・・夢の中でパパとママを応援してた気がする。パパとママもきっと私を応援していたに違いない、うん。

だけど優君は、ちゃんと朝ご飯を食べなかつた過失についてはキチンと責任を認めてるんだ、偉い偉い。

「被害者の頭を撫でるな!」

怒られちゃつた。せっかくの優君とのお出かけなのに・・・・・幸先悪いなあ。

先週の文化祭の話し合いの結果、「パイレーツ・オブ・カリビン」と「風邪の舞」は決定、優君のオンラインステージでは優君が希望していた「冷静大陸」と、沈没で有名な超大作、「怠惰ニック」のテーマ曲を演奏することになった。ところが優君、怠惰ニックを知らないと言うのだ。「飛んでる、わたし飛んでるわ!」と、名シーンのセリフを言つてみても、「クスリでもキメたのか?」と言われてしまつ始末。

といつわけで、これから橋向いのレンタルビデオ屋さんまで行つてDVDを借り、二人で見ようといつことになつたのだ。なんと優君からの誘い!「どれが怠惰ニックなのかわからないから誰かについてきて欲しいんだけど、福島は考慮に入らない。だから日曜お願いできなか?」と、いかにも消去法チックな理由を説かれたけど、いづして一人で並んでお出かけできるんだから気にしな

い。

「こうして近くから改めて優君を眺めてみると、全然女の子として努力してないのに、女の子してる。あんなスースーした腰巻きなんてマッシュピラだ、と言つて好んでよく着ているオーバーオール、肩に掛けた部分は腰に垂らして上からパークーを着る。なんてことない普段着なのに、優君のボーグッシュで爽やかな印象を存在を引き立てるにはそれでも十分役に立つてるんだ。」「こいつジロジロ見んなよ」と言いながら耳を赤くしてるのがなんとも可愛らしいよね。

私はといふと……。優君の引き立て役でしかないのだろう、商店街に入つて人通りが多くなつても、行き交う人々が向ける視線は全部優君の物だ。……いや、それは当然だろ？ 一人で歩いていたつて、私をジロジロ見てくるわけがない。というかそんなことされたら怖い。でも……つらやましいといつ気持ちは変わらない。

「…………ん？ どわつ！？」

急に優君が後ろを振り向く。優君はやや早歩きで私のちょっと前を歩くから、私は優君を後ろから抱き取れるよつた姿勢になつてしまつ。

「うわつぶ……、大丈夫？」

「ああ……、今さ、私のこと変な目で見るやついなかつたか？」

さつきから羨ましいと思われるほど浴びてるじゃなしのさ、今更気付いたの？ この子は……。

「いやそういう意味じゃなくて、もつといづ……、ああなんだ……。

・？ そう、犯罪予備軍的な！

・・・どうだらう、私からすれば優君の今日の可愛さ變りしが犯罪的に見えるよ。みんな優君のこと攫つて可愛いお洋服着せて抱きしめてぎゅーってハグしてほつペムーミーしたいって思つてるんじゃないかな？ 私はそうしたい。

「学校と我が家でほぼ毎日されてるから、もう結構だ」

そんなことをしゃべっている内に、橋も越えて商店街のレンタルビデオ屋さんについてしまつた。きっと中に入つて目的のモノを見つけたらあまつた時間で『VUMP OF PORK』とか『たいらのあやや』とかの新曲のCDもチョックして、でも借りずに目的だけ果たしてまつすぐ帰るんだろうなって思つてた。

「よつ、姫様に歩美君……こんなところで会つなんて奇遇だな！」

優君の観察力はすごいなって、改めて関心しちゃつた。

まつたく…、世の中と並ぶのが虫籠を作りなさいた神とやらで寝を吐きかけたいような気分だ。もともと商店街の本屋という憩いの場所は知り合いと遭遇する可能性が高いこととはわかつたが、だからって天敵と鉢合わせするような出くわし方をさせられるのはご勘弁願いたい。

「いやー、こんな場所で姫様に会えるなんてなんたる偶然…」このような機会を下さった神様には心からお礼をしないとね！ サンキユーロッド！ イツツフライデイ！」

それは仕事に疲れたサラリーマンが、週末の金曜日に飲み会で発するべき台詞だ。決して中学生が使える言葉じゃない。

……これは断じて偶然なんかじゃない、きっとこの前の話を盗み聞きして先回りしてたのかもしれない。いやもしかすれば家の前からずつと尾隨されていたのか？ とりあえず店の中で叫ぶなストーカー（仮）。

「お探しのDVDは『怠惰ニック』だろ？ それならあそこの棚にあるから持つていいくとこ」

そう言いながら指差した区画には、なるほど、旧作洋画のDVDがあいのえお順にすらりと並んでいた。小ぢんまりとした店の入り口付近は新作のモノが陳列してあって、聞かなきやわからなかつただろうから素直に助かつた。

「行きつけ歩美、怠惰ニックを探さなくちゃな

「……ふあ！？ まつ待つて優くーん！」

『隣のアド』や『おどりけ姫』といった例の巨匠映画の区画で知られる歩美は、やや遅れながらついてきた。

ええっと、怠惰一ック、たたたた。あれ？ 無い…。ソレジやないのかな？ タ行の映画はこの一番下の段なんだがな…。俺がしゃがみながら探していると肩を叩かれ、振り向くとヤツのニヤニヤとした顔があった。まさか…、

「姫、お探しのロバロはいからではないですか？」

再び指し示す指はなぜか妙に上向きの角度をしており、その場所には探していたパッケージが二つほど陳列されていた。それもご丁寧にチ行の映画の左側に。

…ハメられた。こいつ、先回りして一番上の段に置き換えたんだ。試しに自分で取ろうとするが、届かない。上から一段目の段のところにギリギリ指が引っ掛かる程度なのだ、自力では無理に決まる。

「ありやつや…、優くんにはちょっと届かないみたいだね？ 私が取つてあげ」

「おつと歩美くん危ない！ 床にGの戦隊が！」

ひえええ！ つと恐れおののく歩美。いや、嘘だつて気付けよ。

「おに福島、性根の腐つた真似しないでさつやとそれ渡せよ」

「これでは姫様がこの『愈縫ニック』を手に入れることが出来ないではないか！ どうしたものか… どうすれば…」

今日はほとこん人の話は聞くものかと決め込んだらしい。いつもより一割り増しで腹たらしい。

「む！ そうか！ その手があった！ そう、この手が！」

福島の手がワキワキと蠢きだしている。今までの経験上この動きは非常に不味い。DVDなんて知ったことではない。状況が変わった。店の出口は… 良し、誰もいない。今なら余裕で抜けられる。三秒数えたら走るぞ。一、二、さ、

「大変だ歩美君！ 今度はそっちに行つたぞ！」

ひえええ！ つと恐れおののき駆け回る歩美。だから嘘だつて気づけ… あ！？ 出口が塞がれた！ 畜生、これじゃあ最短経路が確保できない。福島め、歩美を誘導しやがった。…だが俺の脚力を舐めるなよ、このナリになつてから前と比べてかなりの軽量化が図れたんだ、棚の周りをぐるりと回れば… 行ける。風になれ俺！ 行け！

「さあ姫様どうぞおとづくださいませ…！」

風になる前に見事に防風林に捕まり、両脇を持たれて抱えあげられてしまった。不覚。

「今すぐ離せ」

「それはできません、姫様。『懲罰一撃』を見捨てるおつもりですか？ さあ早く！」

結局何を言つても、そのパッケージを取れの一張りになりそうな気がしたので、仕方なく手に取つた。男女の顔をバックに立派な船の写真が写されている。歩美が言つてたのはこれか、「私飛んでる！」って。今の俺も飛んでるよ。参ったか一撃？ 俺は参りました。さあ今すぐ下ろせ福島…。

「それではカウンタまで向かいましょうか、姫様！」

俺を抱き上げたままカウンタまで向かっていく、このストレート変質者め。…仕方ない、これで気が済むなら好きにするがいい。さすがに外に出たら暴れてでも抜け出すがな。ほら店員さん、このDVDを貸してくれ。

「あらお嬢ちゃんにちわ！ 」このDVD一枚でいいのね？ 旧作だから七泊までできるけどどうつか？」

やたらフレンドリーで若い女性店員がいた。いつも来てたけどこの店にこんな人いたつけ？

「えと… 、七泊でお願いします」

「七泊ね？ 会員証はお持ひですか？ …はい、350円になりますね！」

350円か…、この借りるなら一日で120円くらいで済むのになんか気分的に損した気分になってしまつた。中学生の財布では100円はかなりの力があるぜ。

「はい、ちょうどですね。ありがとうございました。どうぞ」

DVDの入った青い袋を受け取り、レシートをもう片方の手で持つ。…やあやつもとこの店を抜けよう。ほり福島動け。

「今日はお兄ちゃんとお出かけかな?
ライえらい！」

俺たち、端から見たら兄妹らしいよ？ 頭撫でられちゃつた。
あれ？ なんか凄く顔が熱い…、耳の端まで熱いよ？ ……今す
ぐ下ろしてくれ福島、なんか逃げたい気分なんだ、おい！ 福島、
下ろせ、下ろせよー！！

「あは、照れて赤くなっちゃった。本当に可愛いね！」

俺は両手を顔に当てるたま顔を見られないようにしているしかなかつた……両脇から感じる福島の手の感触があまりに不快だったのでも脇を強く締め付けるが、やつこさんは気にせず、むしろもつと指が動いていた。

「じゃあね、お姫様！」

直後、自分の口からハ行とナ行の組み合わさつたなにやら奇妙な発声が出てきたが、そんなことを気にしてられるほど今の俺は心の余裕を持ち合わせていなかつた。店員の「一二一」とした笑顔が目に焼きついて離れない、嗚呼見ないで…。

えぴやーる 姫様御出掛け（中編）（後書き）

またしても更新が途絶え途絶えになつて申し訳ありません、たまに
いただく評価やメッセージにはいつも励されます。今度の更新は
もう少し早くするよう、努力します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6703a/>

お姫様な俺様

2010年10月9日21時00分発行